

暑くてもちょっと飛ばし気味な「らしさ」全開のスタイルを覗きたいよね。

THE DAY

SHIRT & SUMMER STYLE.



2016 MID-SUMMER ISSUE No.16

'16 Summer Style Sample
#夏に効く

とある部屋で



第三回 勝手にベン・ギャザラと
ジョン・カサベテスのしわがれ声へのオマージュ。

styling | Shinya Endo photo | Kenji Nakata story | Senichiro Ozawa

イベントシステムシェルフ 小¥7,143 大¥10,000 (ミスナラ)、ルームシューズ¥1,800、コートハンガーTRAY¥30,000、キャンドルスタンドルーフ¥4,500 (ブラックプラム)、コマ¥2,400 (ハイ)、フロアライトタスク¥146,000 (オリジナルBTC)、オリジナルソファ¥119,400、寝クッション¥88,800 (すべてサンプル本店☎03-6407-9081)、トレストワイヤルハイスツール¥34,000 (ノーザンオハイオインダストリアル)、スパイチュエタ¥46,000 (コンプレックス)、タイニーキャニスター 4oz ¥7,300、\$¥9,500 (ハンブルセラミックス)、ステンレススチールコンテナSM ¥3,000 (ジョリノックス)、オリジナルクッション¥16,000 (すべてコンプレックス☎03-3760-0111)、ゲリドンソリッドウッドテーブル ¥221,000 (ヴイトラ/hhstyle.com 青山本店☎03-5772-1112)、パンカースボックス3個セット¥2,500 (フェローワーク☎03-5496-2401)、その他スタイリスト私物

少

「早く着いてしまった。ついタバコを吸おうとスーツのポケットに手をつ込んだ。そして、1週間前に禁煙をはじめたことを思い出した。長年使っていたゴールドのジバンシーのライターは、決別とばかりに欄干から川へと投げつけてしまった。思い出のものとして、少し惜しい気がしたかなと思いつつ、歩行者用の信号が点滅しているのをぼんやりと見つめていた。」

「あら、待たせてしまった？」
「いや、ちょうど来たところさ」
「いや、待ち人が来た。2人は、交差点の信号で落ち合うと、歩き出した。」
もうすぐ夏がやってくるのがなんとなくわかるような夕暮れ。都会ならではのアスファルトがすえた匂いと生きたかいた風を吸った夜気が、夏の気配を感じさせるのだ。沈む太陽と街灯がパトランプチするのを横目に、2人は小さなカフェと入っていった。店のオーナーらしきグレーのセットアップ

「どうやらオーナーと顔見知りか、常連のようだった。」

「何を注文しようか。食事は？」
「軽く食べてきてしまったの。だから飲み物だけで」
「ワインかビールか。それとも別の何か……」
「そうね。喉が渇いたから、アイスコーヒーがいいわ。それと灰皿もいた方がいいわ」
「そうだね。僕もアイスコーヒーにしよう」
「オーケー。タバコ、やめたんだ」
「あら、すごいじゃない」
彼女は男がライターをかざすものだと思っていたに違いない。しかし、そのひとことを聞くと、自分のバッグからライターを取り出すとしなやかに火をつけた。そして

「あら、すごいじゃない」
彼女は男がライターをかざすものだと思っていたに違いない。しかし、そのひとことを聞くと、自分のバッグからライターを取り出すとしなやかに火をつけた。そして

「何年ぶりかな。君はあまり変わっていないね。もう一度、この街でやってみようと思ったんだ」

「今さら、なにをやるというの。この街が嫌いで嫌いでたまらないって言って、すべてを残したまま、どこかに消えたんじゃないの？」
「そうだったね。だけど、やっぱりこの街でやっておかなくちゃいけないことがあったんだ。ほら、まだあるかな。あの大学ノート……」
「あのヒトラーの回想録ね。あんなもの、とくにどこかへいっちゃったわよ」
「そうか……」
「そくに口をつけていない、たがいのアイスコーヒーに目をやりながら、しばらく無言の時間が流れた。女が2本目のタバコを取り出したとき、男が言った。」
「僕にも1本もええかないかな」
「でしようね」
それから女はニヤリと笑っただけで、タバコを差し出した。

「僕にも1本もええかないかな」
「でしようね」
それから女はニヤリと笑っただけで、タバコを差し出した。

「今日はもう帰ったら。そして明日は、あの部屋にいらっしやい」

「わかった。ところで彼はこここのオーナーなのか？」
男はセットアップを着た大柄の男を目で追いながら女に尋ねた。
「元(もと)彼よ」
「元(もと)？」
「そう今日まで」
女の部屋の片隅にダンボールいくつかの大学ノートがあった。ヒトラーの回想録と言ったそのノートは、男が以前に書きため続

を捨てて去っていく。夢は成し遂げなければ、ただの絵空事。その絵空事に付き合わされた者にも、それを喰って未来を夢見てただけの者にも、厳しい街だ。何でもあって、何でもできるかのような街で、何かをした気になっていただけで時間を無駄に喰っていたと気づいたとき、この街やこの街にあるものに憤懣を抱く。しかし、それは自分自身の過失によるもので、この街にしたら八つ当たりもいところなのだ。
「今日はもう帰ったら。そして明日は、あの部屋にいらっしやい」
「わかった。ところで彼はこここのオーナーなのか？」
男はセットアップを着た大柄の男を目で追いながら女に尋ねた。
「元(もと)彼よ」
「元(もと)？」
「そう今日まで」
女の部屋の片隅にダンボールいくつかの大学ノートがあった。ヒトラーの回想録と言ったそのノートは、男が以前に書きため続



ジャン・ブルーヴェがデザインした(ヴイトラ)のゲリドンソリッドウッドテーブルの上に用意されたのは、その日を持っていたかのような二人の朝食。さまざまなシーンを過ごしてきた食器やコーヒーカップと共に。



家で軽く呑みたいときは、カウンターキッチンにミニバーに変えてしまう。好きなボトルを切らさないように置いておいて、カウンターチェアを持ってきて腰かける。何をしてもなくお酒を飲み、タバコを燃らす。



捨てたいのか捨てたくないのか分からないもの、たまに出すけれどだんはしまっておきたいもの、人からの預かりもの、誰かの忘れもの。そういう類のものをしまっておくのに、しっくりくるのがパンカースボックス。



ブロック型で自由に組み替えができるので、自分仕様のできるソファ。一人で過ごすときにも、二人で過ごすときにも、仕様を変えるだけで同じものを使い続けられる。部屋のどこかに青があると気分がいい。



自由に組み合わせることができるシェルフは部屋の仕切りにもなる。小物は色味を揃えるのがポイント。ボトル型の照明は、リラクセスできる柔らかな光を放つ。ポトルド¥29,000 (サンプル本店☎03-6407-9081)

REISM



「Union」と名づけられたこの部屋は、パーケット調の床と黒のアクセントカラーがモダンなデザインルーム。水周りのスペースや収納がたっぷりあるので、リビングスペースを広く使うことができる大人の部屋。

「部屋」を用意してくれたREISM (リイスム)は、都心で働く20~30代の「スタイル」に合わせたデザインブランド。あたらしく出会える。www.re-ism.jp